

果樹カメムシ類の近年の発生動向と防除

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 み しろ こう じ
植物防疫研究部門 三 代 浩 二*

はじめに

果樹を加害するカメムシ類は、農林有害動物・昆虫名鑑増補改訂版（日本応用動物昆虫学会，2006）ではカンキツで22種，リンゴ8種，ナシ14種，モモ8種，カキ22種，ブドウ4種が記載されている。これら主要な果樹のひとつでも加害するカメムシは41種記載されており，この中で特に発生量と果実被害が多いチャバネアオカメムシ *Plautia stali*，ツヤアオカメムシ *Glaucias subpunctatus*，クサギカメムシ *Halyomorpha halys* の3種を果樹カメムシ類と呼ぶ。この3種はほぼすべての主要な果樹の果実を加害する。近年は周年での気温上昇の影響もあり，北海道で醸造用ブドウやリンゴに対して果樹カメムシ類の注意報が発表され（北海道病害虫防除所，2025），北東北ではチャバネアオカメムシによるリンゴの被害が増加している。また，南方系のツヤアオカメムシの発生が東北地方にまで拡大している。本稿では果樹カメムシ類の生態と防除対策およびその変遷，ならびに近年の発生動向から特に2024年の全国的な多発生の要因について考察する。

なお，本稿は2026年1月に開催された日本植物防疫協会シンポジウム「温暖化がもたらす新たな病害虫発生リスクを考える」の講演内容をまとめたものである。

I 果樹カメムシ類の生態

前記の3種の果樹カメムシ類の生態は主要種であるチャバネアオカメムシの情報量が多く，本種を中心に解説されることが多い。

チャバネアオカメムシは広食性で成虫の寄主植物は47科112種の植物（spp.含む，以下同），幼虫は30科45種で発育が可能とされている（小林・立川，2004）。

成虫が林縁部等の落葉下などで越冬し，春の気温の上昇とともに餌を求めてサクラやクワなど種々の植物間を移動する（守屋・志賀，1982）。移動の過程で果樹園にも飛来してウメ，ビワ，モモやナシなどの幼果やカンキツの花を加害する（越冬世代による被害）。その後，スギ・ヒノキなどの球果が充実するとそれらが植生している林地に移動して産卵し，球果を餌に幼虫が発育する。夏季に新成虫が出現し，球果が豊富で気温が高い状態が続くと，その後1~3世代増殖を繰り返す。この過程で球果を消費し尽くすと，羽化した成虫が餌を求めて林地を離脱して果樹園に飛来しカンキツやナシ，カキなどの果実を加害する（当年世代による被害）（三代，2024）。当年世代の発生世代数は，生殖休眠に入る臨界日長に至るまでの期間の気温と球果の豊凶が大きく影響する。

クサギカメムシはチャバネアオカメムシと同様に広食性で，幼虫は針葉樹の球果以外でもウワミズザクラ（舟山，2007）やリンゴ果実（舟山，2005）等の31科55種の植物で発育する（小林・立川，2004）。成虫が建物の隙間や樹皮下などに集団を形成して越冬する。1年間に1~2世代発生する。幼虫の主要な寄主がスギやヒノキ以外にも多いことは，針葉樹の球果を主要な餌として幼虫が発育するチャバネアオカメムシやツヤアオカメムシとは発生パターンが異なることを示している（外山，2014）。

ツヤアオカメムシは成虫が26科34種の植物を寄主として利用しており，幼虫は4科5種の植物で発育することが確認されている（小林・立川，2004；本田，2016）。近年の調査ではこのうち特にナンキンハゼ（本田・糸山，2013a）やハナミズキ（本田・糸山，2013b），クロガネモチ（本田・糸山，2014）で幼虫が発育することが報告されており，野生寄主として発生量調査の調査対象樹種に使用できる可能性がある。成虫が常緑樹の葉裏やヒノキ等針葉樹の葉が重なり合った場所で越冬する。地域やその年の気象条件により年間1~3世代発生する（小沢ら，2016；貴志ら，2017；綱島ら，2017；糸山・綱島，2024）。

Occurrence Trends and Control of Fruit-sucking Stink Bugs.

By Koji MISHIRO

（キーワード：チャバネアオカメムシ，ツヤアオカメムシ，クサギカメムシ，発生の生態，防除）

*現所属：農研機構九州沖縄農業研究センター